

道徳基盤理論に基づく実践の意義と課題に関する一考察

教育心理学コース 眞田英弥

指導教員 遠藤利彦

「義務でもない限り、発達心理学者が、「であるからべきであるへ」という主張を携えて、いわば、哲学者のオオカミの穴へ入っていくのはばかげているに違いない (Kohlberg, 1971 永野編 1985 p. 5)」

道徳心理学の祖たる Kohlberg が、上記のように述べると同時に、『『である』から『べきである』へ』という挑戦的なタイトルをつけてそうした試みを行った一因は、彼の理論に基づく研究成果を教育、あるいはその他の実践に応用しようと考えたことにある。それから半世紀が経過し、道徳心理学は発達心理学のみならず種々の心理学や神経科学等々、多様な関心の下で検討されるようになった。その中で、道徳性を説明しようとする心理学理論として、ここ 10 数年で大きな影響を有するに至った理論が、道徳基盤理論 (Graham et al., 2013; Haidt, 2012 高橋訳 2014) である。

本稿は、道徳基盤理論が、「実践」に対していかなる意義をもち得るのかについて論考を加えるものである。本稿では、道徳基盤理論が道徳性の個人差を説明するものであることから、特に、異質な人びとに着目し、その共生に関する実践、殊に、異質な他者を説得することと異質な他者を理解することという 2 通りの実践について論ずる。したがって、実践を視野に入れて論ずる以上、その途上で、Kohlberg 同様、本稿も「べきである」の議論に携わらざるを得ない。ただし、本稿は、Kohlberg のような形で、道徳性に関する理論の正当性を主張しようとするものではない。本稿は、あくまでも「である」についての理論としての道徳基盤理論を前提として、そこから派生する実践に対して、「べきである」に関する議論を行うものである。もっとも、筆者の能力の限界および関心の問題から、結局のところ、「べきである」よりも「である」に関する課題の言及が中心となってしまった。

より具体的に本稿の構成を述べれば、以下ではまず、道徳心理学の歴史と道徳基盤理論の概要について、簡潔に述べる。また、ここまで繰り返し述べているような「べきである」と「である」の関係について述べる。そのうえで、道徳基盤理論に基づく実践を、異質な他者を説得することと、異質な他者を理解することの 2 通り紹介し、その「べきである」と「である」のそれぞれの課題と展望を述べ、まとめることとする。

1. 道徳基盤理論とは何か

本章では、道徳性に関する心の仕組みに関して、道徳基盤理論に先行して存在する理論を概説するとともに、道徳基盤理論を、本稿の議論に必要な範囲に限定して説明する。

道徳性に関する心の仕組みを説明しようとする理論は、伝統的には Kohlberg (1969) 以来、Gilligan (1982) や Turiel (1983) など、その草創期には、主として発達心理学の領域で検討されてきた。そして、Turiel (1983) が正義、権利、福祉と言ったように、どちらかというところ、道徳性をやや狭く定義してきており、その中核的な関心事から外れるもの、例えば目上の人に対する敬意といったものは、道徳性の中で相対的に軽視されてきたと言ってよいだろう。一方で、Shweder らの研究 (Shweder, Much, Mahapatra, & Park, 1997) や Fiske (1991) の研究に見られるように、文化人類学出身の研究者が中心となったアプローチでは、従来相対的に軽視されてきた側面にも目が向けられ、多様な道徳性の理解に新たな、そして時に対立する視座が提示された。

このような背景の下で、特に後者の Shweder らや Fiske の影響を受けながら、進化心理学 (Barkow, Cosmides, & Tooby, 1992) の考えや、中心的な提唱者である Haidt 自身の社会的直観モデル (Haidt, 2001) を組み込みながら提起された理論が道徳基盤理論である (Haidt & Joseph, 2004; Haidt & Graham, 2007)。道徳基盤理論は、このような理論的背景を持ちながら、実証研究としても、リベラルとコンサーバティブの道徳判断の違いの背後にある、道徳性の違いを実証的に示し (Graham, Haidt, & Nosek, 2009)、この研究を基に尺度が作成され (Graham et al., 2011)、その後の研究で各国語に翻訳され広く用いられるなど、現在、道徳心理学や社会、パーソナリティ心理学をはじめとして、幅広く用いられている理論である。

道徳基盤理論の中核的な仮定は 4 つ、すなわち、直観主義、多元主義、生得主義、文化学習である (Graham et al., 2013)。とはいえ、これらの仮定を紹介し、子細に検討することは、本稿の目的から外れるため別稿に譲ることとし、4 つの仮定 (および調査、実験研究、理論的考察に基づく補助仮説の総体) に基づき、主として直観主義、多元主義を中心として、本稿にとって重要な結論のみを述べよう [生得主義、文化学習については、例えば Haidt & Joseph (2007) を参照してほしい]。

1. 1. 道徳性はいかなるものか

本節では、道徳基盤理論の、道徳性にはカテゴリーが複数あるという想定について説明するとともに、道徳性に関して想定されている心的メカニズムについて簡潔に述べる。加えて、カテゴリーがなぜ複数想定され得るのかについても説明する。

複数のカテゴリーといっても、その数は確定しているわけではない。5 つなのかもしれないし 6 つなのかもしれないし、あるいはそれ以上に多数存在するのかもしれないが、Haidt らが当初、カテゴリーとして、自身の規準に照らして確かなものであると考えたのは、5 つのカテゴリーである (Haidt & Joseph, 2004; Haidt & Graham, 2007)。すなわち、「ケア／危害」、「公正／欺瞞」、「忠誠／背信」、「権威／転覆」、「神聖／墮落」の 5 つである [ただし、カテゴリーの名前は、論文の時期によって変遷があるが、ここでは Haidt (2012 高橋訳 2014) のものを用いた。本稿では、今後も、論文で実際に使用されているカテゴリー名にか

かわらず、分かりやすさのためにこれらの名称を用いることとする。なお、Haidt (2012 高橋訳 2014) では、「自由／抑圧」というカテゴリーも紹介されているが、ここでは紹介しない]。5つのカテゴリーが何を指すかについて、「ケア／危害」と「忠誠／背信」を例にとって考えよう。簡単に言えば、「ケア／危害」は苦痛やニーズに関連するカテゴリーであり、「忠誠／背信」は、集団の結束に関連するカテゴリーである。重要なのは、心的メカニズムとして、これらのカテゴリーに関連する出来事を見かけると、その出来事に対し肯定的、あるいは否定的な直観が生じ、その結果としてよい／悪いという判断が生じるということである。例えば、「誰かが殴られる」という出来事を見かけたならば、否定的な直観が生じ、即座に悪いという判断が生じる。これは、「ケア／危害」に関連する出来事である。さらに、誰かではなく、「身内が殴られる」という出来事も同様に直観を生じさせるだろうが、これは、「ケア／危害」のみならず、身内という集団に対する攻撃であるため、「忠誠／背信」のカテゴリーにも関連する出来事である。このように、カテゴリーは必ずしも相互に排他的ではないが、直観を典型的に生じさせるような出来事を区分し得るものである。

それでは、なぜこのような直観が重要であるのだろうか。実は、道徳基盤理論は、Haidt (2012 高橋訳 2014) が、“まず直観、それから戦略的思考”というように、こうした直観が想起した後に、判断が生じ、その判断に基づいて、それを正当化するためのリーズニングが生じるのが、道徳の問題に直面した際の典型的な反応であると考えている。したがって、このような定式化は、リーズニングを重視する Kohlberg (1969) や Turiel (1983) の考え方とは一線を画すものであり、よい／悪いとなぜいえるのかに関するリーズニングがあり、そのリーズニングの結果を受けてよい／悪いという判断が生じるという常識的な見方に反するものである。このように、道徳基盤理論は、他の理論と比較して、直観を極めて重視し、またそれゆえ直観を生じさせる出来事のカテゴリーも重要視しているのである。なお、本稿は、上述のような形で直観を重視する直観主義が正しいことを説得するものではないため、その論拠について詳述はしないが、詳細については例えば Haidt (2001) を参照してほしい。

このように、道徳性のカテゴリーは複数あり、直観を基盤としてその後の判断やリーズニングが生じるというのが、道徳基盤理論が仮定する心的メカニズムである [ただし、特有の情動など、そのほかのメカニズムも仮定されているが、本稿では省略していることに留意してほしい]。このようなメカニズムの仮定に加えて、道徳基盤理論は、ただカテゴリーが複数あると述べるにとどまらず、なぜそれらのカテゴリーが複数あり得るのか、ということも仮定している (Graham et al., 2013; Haidt, 2012; Haidt & Joseph, 2004)。

道徳基盤理論では、道徳性のカテゴリーが複数あり、またなぜそれらのカテゴリーであるのかを説明するにあたって、我々の祖先が直面した種々の適応課題に迅速に反応できるようにするためであると仮定している。「ケア／危害」と「忠誠／背信」を例にとってみよう。「ケア／危害」の適応課題は、子どもを保護しケアすることであり、「忠誠／背信」の適応課題は強固な集団を築くことである。このような適応課題に対し、ある種の「効果的」な反応をすることができれば、生存、生殖に有利となる。したがって、そのような反応を産み出

し得る形質が選択されてきたと考えるのであり、また適応課題が複数あるがゆえに、道徳性もまた複数存在していると考えるのである。

2. 道徳基盤理論の実践的意義

前章では、道徳基盤理論が、道徳性を5つ程度のカテゴリーで捉え、直観を重視していること、またそれら心的メカニズムの起源に関する進化的な説明を見た。本章では、特に5つのカテゴリーというように、多元的に道徳性を捉える道徳基盤理論が、異質な人びとの共生に関する実践に対していかなる意義があるのかを、実証研究の知見も参照しながら述べる。ただし、その際に十分に留意しなければならないことは、「である」と「べきである」を峻別することである。したがって、まずはこの点について簡潔に述べることにする。

前提として、Hume (1739-1740 木曾ら訳 1995-2012)がかつて指摘したように、「である」から「べきである」を引き出すことはできない[ただし、例えば James (2011 児玉訳 2018)を参照のこと]。「である」から「べきである」を引き出すことは、現代では、Moore (2000 泉谷・寺内・星野訳 2010)の言を借りて、自然主義的誤謬という名で知られる誤謬である。

道徳基盤理論は「である」についての理論であり、何か「べきである」についてのものではない (e.g., Graham et al., 2013)。すなわち、理論で意図されているのは、あくまでも「忠誠／背信」といったカテゴリーを道徳の問題として捉えている人が多く、また出来事が道徳の問題として捉えられた場合にいかなる反応が生じるかということ、そしてなぜ、いかに、そのような現象が生じ得るのかということの説明にすぎない。したがって、例えば「忠誠／背信」と「ケア／危害」は同列の道徳であって同様に尊重されるべきであるという主張をしているわけではないし、そのようなカテゴリーに属する出来事がよい／悪いと判断されやすいのだから、それは確かによい／悪いものなのであると規範的に主張しているわけではない。あくまで、道徳基盤理論が企図しているのは上述のように「べきである」ではなく「である」についての、すなわち、規範的な理論ではなく記述的な理論なのである。

加えて注意すべきは、「である」から「べきである」を引き出すことが誤謬であるのと同様に、「べきである」から「である」を引き出すこともまた、道徳主義的誤謬と呼ばれる誤謬であるということである (Davis, 1978)。例えば仮にある規範的立場からすれば、「ケア／危害」あるいは「忠誠／背信」が道徳の問題として捉えられるべきではないと考えられるとしても、だからといって、現に「ケア／危害」あるいは「忠誠／背信」が道徳の問題として捉えられていることや、そのように捉えさせやすくする心の仕組みがあることを否定すべきではない。

以上見てきたように、道徳基盤理論は「である」についての、すなわち記述的な理論であり、ここから即座に「べきである」を引き出すような取り組みは自然主義的誤謬であるとともに、逆に、「べきである」の立場、すなわち規範的な理論から、記述的な理論たる道徳基盤理論を否定することもまた、道徳主義的誤謬である。しかし、こと実践にあたっては、何を目的として何をするかという点において、「べきである」の問題が入り込まざるを得ない。

以下では、この点に留意した上で、道徳基盤理論が、種々の実践においていかなる意義があり得るのかについて述べる。

2. 1. 異質なる他者を説得する

ここまで繰り返してきたように、道徳基盤理論は、何が道徳的であるべきかについては語らない。しかし、道徳基盤理論は、自身とは異なる他者がなぜ、「道徳」に関連し得る何かを重要だと思っているのかを理解し記述するための言語 (Graham et al., 2013) となり得るし、また、それは同時に他者を説得するための言語としても機能し得る。その証左として、注目に値するのが、道徳的リフレーミング (e.g., Feinberg & Willer, 2013; Voelkel & Feinberg, 2018; Wolsko, Ariceaga, & Seiden, 2016; レビューとしては Feinberg & Willer, 2019) に関する研究である。道徳的リフレーミングとは、ある主張に関する説得的なアーギュメントを作成するにあたり、その主張に反対するような人が重視している道徳的価値を想定し、その道徳的価値に訴えるようなアーギュメントを作成する手法である。例えば、Feinberg & Willer (2013)は、政治的立場の違いに応じて態度の違いがみられる環境問題に着目したうえで、環境問題に関するアーギュメントを用いて、道徳的リフレーミングの効果を検証している。この研究では、まず、参加者を3群に分け、それぞれの群に異なる種類のアーギュメントを呈示している。1つ目の群は、ネクタイの歴史に関するアーギュメント、すなわち、環境問題とは関係のないニュートラルなアーギュメントを呈示する群である。2つ目の群は、「ケア／危害」に関連する、環境保護についてのアーギュメントを呈示する群であり、3つ目の群は、「神聖／墮落」に関連する、環境保護についてのアーギュメントを呈示する群である。その結果、まず前提として確認されたのは、リベラルはコンサーバティブよりも環境保護に肯定的な態度を取り (ニュートラル群)、リベラルが特に重視する「ケア／危害」に関するアーギュメントを呈示された場合も同様に、リベラルがコンサーバティブよりも環境保護に肯定的な態度を取るとのことである。しかし、より重要なのは、コンサーバティブが、リベラルに比して重視する「神聖／墮落」に関するアーギュメントを呈示された場合には、上記のようなリベラルとコンサーバティブの態度の違いが見られないということである。

なお、環境問題に対するアーギュメントは、Feinberg & Willer (2013)の実施した、新聞の論説、公共広告に対する内容分析によれば、リベラルが強く重視している「ケア／危害」に依拠するものが多いという。したがって、これをコンサーバティブがリベラルに比して重視する「神聖／墮落」に変更する、すなわち、“リフレーミング”することによって、違いが見られたと考えられるのである。ただし、このような現象は何も、コンサーバティブに限ったものではなく、リベラルにも同様の効果が見込まれるものである。実際、Feinberg & Willer (2015)では、例えば軍事費に関してリベラルに道徳的リフレーミングの効果がみられることを示している。

このように、道徳的リフレーミングが、相手を効果的に説得できるとすれば、それは積極

的に実施されるべきであるという結論が容易に導き出せるように一見すると思われるが、ここで立ち止まって、以下二つの視座から検討に付したい。

第一に、「である」の問題、すなわち実証研究および実践の効果に関連する問題である。Feinberg & Willer (2019)が指摘しているように、調整要因の検討はまだ始まったばかりである。したがって、例えばどのような状況のときに効果的なのか、あるいは逆効果になってしまうのかということの解明は不十分である。仮にVoelkel & Brandt (2019)が指摘しているように、政治的立場の違いと道徳性の関連が、道徳性それ自体の個人差によるだけでなく、内集団／外集団の違いによるものもあるのだとすれば、外集団の成員が道徳的リフレーミングを用いて説得を行うことの効果には疑問が付されることとなろう。この点に関しては、現在既に検討が始まっているようであるが、知見が蓄積されるまでは、道徳的リフレーミングを用いた実践を積極的に行っていくということに関しては慎重になるべきであろう。また、道徳的リフレーミングは、主として政治的立場の違い(リベラル・コンサーバティブ)に基づき議論することが多いが、これが欧米圏を離れ、例えば日本においてどの程度あてはまるのかについても、理論的な検討とともに実証的な検討をしていく必要がある。加えて言えば、Day, Fiske, Downing, & Trail (2014)のように、道徳的リフレーミングの効果が一部見られない研究もあり、総じて言えば、道徳的リフレーミングの効果について、未だ頑健であるとは言えないというのが現状であると言えよう。

第二に、上述したような知見が今後蓄積され、いかなる場合に、どの程度効果があるのかということが明らかになったとして、その場合にも、果たして道徳的リフレーミングを用いることは正しいのだろうか、という問題である。道徳的リフレーミングにおいて、自身が重視していない道徳性を基に説得する場合には、自身がなぜ正しいと思っているのかを伝えることはできない。とすれば、仮に同様の結論に達したとして、それは共通理解に達したと言えるのだろうか。また、自身が重視していない道徳性を基に説得するという行為自体の正しさも問われ得るものだろう。無論、こうした議論は、「べきである」の問題であるが、道徳的リフレーミングを実践に付すにあたっては、これら「べきである」の問題を考慮することは必要不可欠であろう。

2. 2. 異質なる他者を理解する

前節では、道徳的リフレーミングを例にとって、道徳基盤理論に基づいて、異質なる他者を説得することに関する議論を行った。実証研究としては重要な知見が得られている一方で、未だ明らかになっていないことも多く、また「べきである」の問題としても課題があることが示された。前節のアプローチでは、道徳基盤理論の視点から、異質なる他者を説得するという実践を捉えたが、一方で、先述のように、異質なる他者を理解するという実践を捉えることも重要であろう。本節では、その可能性について検討する。

なぜ、異質なる他者を理解するのは困難であるのだろうか。この問いに対して回答する前に、まずは、そもそもいかにして、他者とは異なり得る自身の見解を持つに至るのかを検討

しよう。ここで例に挙げたいのは、コンサーバティブとリベラル（伝統主義者と進歩主義者）の間で、妊娠中絶や死刑制度など多種多様な題材に対する見解の相違が指摘されているアメリカの文化戦争である。Koleva, Graham, Iyer, Ditto, & Haidt (2012)は、そのような見解の相違が、道徳基盤理論が想定する 5 つの道徳性のそれぞれを重視する程度と相関することを示し、文化戦争の背景に道徳性の違いがあることを示唆した。そこでは、実証的には方法論の課題から明確には示せてはいないが、理論的には、文化戦争にかかわる問題（例えば妊娠中絶）に対し、その問題に対する直観が生じ（例えば「神聖／墮落」に関する直観）、それが判断に強く影響を及ぼすということが想定されている。したがって、そうした道徳性の違いに応じて、異なる見解が生じるということが想定されるのである。

一方で、このようになぜある見解を持つのかということではなく、なぜ異質な他者の立場を理解できないのかということに関してもまた似たような論理で考えることが可能である。実証的に示されているわけではないが、Ditto & Koleva (2011)は、同じ問題であっても、人によって生じる直観が異なり、またそのような直観は反射的で自動的であるがゆえに、自身で下方制御することも、また他者に生じているであろう直観を想像し共感することも困難であると考え、このような乖離を指して道徳における共感のギャップ (Moral Empathy Gaps) と呼んでいる。さらには、その道徳における共感のギャップによって、異質な他者に共感できない結果、態度の違いを、他者の非論理性や悪意に帰してしまおうとしている。したがって、Dittoらは、そのような事態が生じないようにするためにも、異質な他者に対する共感が極めて重要であるとするのである。

このようなアプローチにおいては、実証的研究による裏付けが、今後着実になされていくことが必要であることは言うまでもないが、前節で生じたような「べきである」の問題は生じないように思われる。ただし、相手に対して共感を抱いた場合に、それらは異なる道徳性であるのだから、相手も正しく自分も正しく、その間に優劣をつけるべきではないといった形での相対主義につながり得る、という「べきである」のレベルの批判は、あり得るかもしれない。

しかし、相対主義の是非はおいておくとして、確認しておくべきは、第一に、人びとが異なる道徳性を有するという「である」の主張や理解から、即座に、人びとの間の道徳性に優劣をつけるべきではないというような主張を引き出すのは自然主義的誤謬であるということである。第二に、相対主義につながり得るというだけであって、必ず相対主義に陥るというわけではなく、相対主義につながるか否か、あるいはその程度というのは、実証的観点から検討されるべき問題であるということである。すなわち、共感を抱いた後に、異質な他者間で議論をするといかなる議論になるのか、あるいは、議論をせずとも、自身の態度や信念がいかに変容するのかといったことを検討してはじめて、異質な他者に共感を抱くことが相対主義につながるという主張の妥当性を判断することが可能となるのである。

3. おわりに

本稿では、異質なる人びとの共生に関する実践に対して、道徳基盤理論がいかなる貢献をし得るのか、そしてそこにいかなる課題があるのかという問いを検討するために、道徳基盤理論を紹介し、「である」と「べきである」の違いに留意しながら、実践の可能性と課題について述べた。その中で、異質なる他者を説得することと、異質なる他者を理解することの2通りの実践に分けて議論をしたが、特に前者には、心理学を超えて「べきである」のレベルでの更なる検討が必要であることが明らかとなった。無論、現段階でもそのような検討は十分に可能であり、あるいは既になされているのかもしれないが、筆者の能力の限界により、極めて限定的な議論にとどまっていることに留意してほしい。また、2通りの実践の双方において、このような「べきである」のレベルの議論のみならず、「である」のレベルの課題、すなわち実証研究の蓄積も不十分であることが指摘された。なお、道徳基盤理論の実証研究について付言すれば、実は、現在、これまで用いられてきた尺度 (Graham et al., 2011) に代わる、統計学的により適切な新たな尺度 (Atari, Haidt, Graham, Koleva, Stevens, Dehghani, 2022) が作成された段階である。この研究においては、道徳性のカテゴリーやその数、種類、定義も刷新されているなど、理論的にも大きな変更がなされており、今後一層の理論的、実証的研究の進展が期待されているところである。したがって、道徳基盤理論は、現段階では、頑健で実践に即座に役立つ理論であるとは言い難く、今後の「べきである」における検討も、「である」における検討も、その接点の検討も必要であるというのが、本稿の結論である。しかし、今後の検討が必要であるということは、換言すれば、今の段階で、理論にせよ実践にせよ、それらが否定されなかったともいうことができ、今後、成果が得られる可能性は高いと考えられる。社会の分断が叫ばれる中、異質なる人びとの共生に向けて、道徳基盤理論に基づく実践を模索していく価値は十分にあると言えよう。

参考文献

- Atari, M., Haidt, J., Graham, J., Koleva, S., Stevens, S. T., & Dehghani, M. (2011). Morality beyond the weird: How the nomological network of morality varies across cultures. *PsyArXiv Preprints*. <https://doi.org/10.31234/osf.io/q6c9r>.
- Barkow, J. H., Cosmides, L., & Tooby, J. (Eds.). (1992). *The adapted mind: Evolutionary psychology and the generation of culture*. New York: Oxford University Press.
- Davis, B. (1978). The moralistic fallacy. *Nature*, 272, 390.
- Day, M., Fiske, S., Downing, E., & Trail, T. (2014). Shifting liberal and conservative attitudes using moral foundations theory. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 40(12), 1559-1573.
- Ditto, P., & Koleva, S. (2011). Moral empathy gaps and the American culture war. *Emotion Review*, 3(3), 331-332.
- Feinberg, M., & Willer, R. (2013). The moral roots of environmental attitudes.

Psychological Science, 24(1), 56–62.

Feinberg, M., & Willer, R. (2015). From gulf to bridge: When do moral arguments facilitate political influence? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 41(12), e12501.

Feinberg, M., & Willer, R. (2019). Moral reframing: A technique for effective and persuasive communication across political divides, *Social and Personality Psychology Compass*, 13(12), 1665–1681.

Fiske, A. P. (1991). *Structures of social life: The four elementary forms of human relations: Communal sharing, authority ranking, equality matching, market pricing*. New York: Free Press.

Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.

Graham, J., Haidt, J., Koleva, S., Motyl, M., Iyer, R., Wojcik, S. P., & Ditto, P. H. (2013). Moral foundations theory: The pragmatic validity of moral pluralism. *Advances in Experimental Social Psychology*, 47, 55–130.

Graham, J., Haidt, J., & Nosek, B. A. (2009). Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96(5), 1029–1046.

Graham, J., Nosek, B. A., Haidt, J., Iyer, R., Koleva, S., & Ditto, P. H. (2011). Mapping the moral domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 101(2), 366–385.

Haidt, J. (2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*, 108(4), 814–834.

Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. New York: Pantheon.

(ハイト, J. 高橋 洋 (訳) (2014). *社会はなぜ左と右に分かれるのか——対立を超えるための道徳心理学——* 紀伊國屋書店)

Haidt, J. & Graham, J (2007). When morality opposes justice: Conservatives have moral intuitions that liberals may not recognize. *Social Justice Research*, 20(1), 98–116.

Haidt, J., & Joseph, C. (2004). Intuitive ethics: How innately prepared intuitions generate culturally variable virtues. *Dædalus*, 133(4), 55–66.

Haidt, J., & Joseph, C. (2007). The moral mind: How five sets of innate intuitions guide the development of many culture-specific virtues, and perhaps even modules. In P. Carruthers, S. Laurence, & S. Stich. (Eds.), *The innate mind*. Vol. 3 (pp. 367–391). New York: Oxford University Press.

- Hume, D. (1739-1740). *A treatise of human nature: Being an attempt to introduce the experimental method of reasoning into moral subjects*. London. (ヒューム, D. 木曾 好能/石川 徹・中釜 浩一・伊勢 俊彦/伊勢 俊彦・石川 徹・中釜 浩一 (訳) (1995-2012). 人間本性論 法政大学出版局)
- James, S. M. (2011). *An introduction to evolutionary ethics*. Chichester: Wiley-Blackwell. (ジェイムズ, S. 児玉 聡 (訳) (2018). 進化倫理学入門 名古屋大学出版会)
- Kohlberg, L. (1969). Stage and sequence: The cognitive-development approach to socialization. In D. A. Goslin (Ed.). *Handbook of socialization theory and research*. (pp. 347-480). Chicago: Rand McNally.
- Kohlberg, L. (1971). From is to ought: How to commit the naturalistic fallacy and get away with it in the study of moral development. In T. Mischel (Ed.), *Cognitive development and epistemology* (pp. 151-235). New York: Academic Press.
- (コールバーグ, L. 「である」から「べきである」へ 永野重史 (編) (1985). 道徳性の発達と教育 (pp. 1-123) 新曜社)
- Koleva, S. P., Graham, J., Iyer, R., Ditto, P. H., & Haidt, J. (2012). Tracing the threads: How five moral concerns (especially Purity) help explain culture war attitudes. *Journal of Research in Personality*, 46(2), 184-194.
- Moore, G. E. (2000). *Principia Ethica* (Revised ed.). Cambridge University Press. (ムア, G. E. 泉谷 周三郎・寺中 平治・星野 勉 (訳) (2010). 倫理学原理 三和書籍)
- Shweder, R. A., Much, N. C., Mahapatra, M., & Park, L. (1997). The “big three” of morality (autonomy, community, divinity) and the “big three” explanations of suffering. In A. M. Brandt & P. Rozin (Eds.), *Morality and health* (pp. 119-169). New York: Routledge.
- Turiel, E. (1983). *The development of a social knowledge: Morality and convention*. New York: Cambridge University Press.
- Voelkel, J. G., & Brandt, M. J. (2019). The effect of ideological identification on the endorsement of moral values depends on the target group. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 45(6), 851-863.
- Voelkel, J. G., & Feinberg, M. (2018). Morally reframed arguments can affect support for political candidates. *Social Psychological and Personality Science*, 9(8), 917-924.
- Wolsko, Ariceaga, & Seiden (2016). Red, white, and blue enough to be green: Effects of moral framing on climate change attitudes and conservation behaviors. *Journal of Experimental Social Psychology*, 65, 7-19.